Japan ORIENTEERING Association NEWS

JOA NEWS

Japan Orienteering Association

2026.1

音がなくても伝わる、熱い応援

東京2025デフリンピック 10-12 p

Special
年頭所感 2 p

Pick Up
日本開催！世界スキーO選手権大会 4 p

Report
第14回全日本選手権大会[ミドル・ディスタンス競技部門] 3 p
第6回アジアジュニア・ユース選手権 5 p
第12回ワールドゲームズ、世界MTBO選手権大会 6-7 p
世界トレイルO選手権大会、ねんりんピック 8-9 p

私たちはスポーツ振興くじ助成を受けています スポーツくじ WINNER toto BIG

年頭所感

JOA会長　野田 聖子

新年あけましておめでとうございます。

本年も、全国のオリエンテーリング愛好者の皆さまと心をひとつにして、この素晴らしいスポーツの発展に取り組んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、昨年10月に開催されました全日本オリエンテーリング大会ミドル競技において、参加者の方が行方不明となり、後日ご遺体で発見されるという、非常に痛ましい事故が発生しました。尊い命が失われたことを心から悼むとともに、ご遺族の皆さまに謹んで哀悼の意を表します。この出来事は、私たちJOAにとっても、そしてオリエンテーリングという競技のあり方そのものにとっても、非常に重い意味を持つものでした。捜索活動に多大なご協力をいただいた多くのボランティアの皆さま、警察・消防の方々に深く感謝するとともに、今後の大会運営における安全対策を徹底することを、JOAとして改めて誓いたいと思います。

一方で、自然の中で自らの判断で進むオリエンテーリングでの安全は、最終的には参加者一人ひとりの行動にかかっています。参加者の皆さまにも、自らの体調や行動、装備、そして判断に対する意識を高めていただくことが、全体の安全性を高める鍵となります。事故の詳細な検証および再発防止策については、危機管理・コンプライアンス委員会のもと、第三者の知見も取り入れながら早急に取りまとめてまいります。

そのような中で、11月に開催された「ねんりんピック岐阜2025」では、多くのオリエンティアの皆さまと現場で交流させていただきました。長年競技を支えてこられた皆さまの情熱と笑顔に接し、改めてオリエンテーリングの持つ力、そしてこの競技を未来へとつなぐ責任の重さを実感いたしました。

また、同月に「東京2025デフリンピック」が東京で開催され、私は開会式に出席する機会をいただきました。きこえない・きこえにくい選手の皆さんが、オリエンテーリングを含む各競技に真摯に挑む姿に深く心を打たれました。加えて、大会を支える運営の皆さまの献身的なご尽力にも、改めて敬意を表したいと思います。スポーツがもつインクルーシブな力と、多様な人々をつなぐ可能性を、強く感じた場でもありました。

そして本年3月、私たちの念願であった「世界スキーオリエンテーリング選手権大会」が、いよいよ北海道で開催されます。国内外のトップ選手が集うこの大会が、日本のウィンタースポーツ文化や地域の魅力を世界に発信する契機となることを心から期待しています。皆さまの温かいご支援とご声援を、ぜひよろしくお願いいたします。

2026年が、すべてのオリエンティアにとって実り多い年になりますように。そして、誰もが安全に、安心してこの競技を楽しめるよう、JOAとしても努力を続けてまいります。どうか、皆さまお一人おひとりも、安全に対する意識と行動を高める仲間として、ともに歩んでいただければ幸いです。

本年も引き続き、ご理解とご協力をお願い申し上げます。

命の教訓を未来につなぐために

公益社団法人日本オリエンテーリング協会

2025年10月4日に開催された第14回全日本オリエンテーリング大会（ミドル・ディスタンス競技部門）において、競技中に帰還されなかった競技者について、有志の皆さまと日本オリエンテーリング協会役員による捜索によりご遺体が発見され、その後警察により当該競技者であることが確認されました。
ここに、ご遺族の皆様に心より哀悼の意を表し、深くお悔やみ申し上げます。

捜索に際し、多大なご尽力を賜りました栃木県警察本部、関係警察署、消防・防災関係機関、ならびにオリエンテーリング関係団体・競技者の皆様に深く御礼申し上げます。

当協会は本件を極めて重く受け止め、10月14日に安全対策オンライン説明会を開き、そこで示した対策を速やかに実施するとともに、警察の現場検証結果を踏まえ、事故の背景や安全管理体制の課題について分析を進めてまいります。さらに、危機管理・コンプライアンス委員会を主体とし、外部有識者の助言を得ながら調査・検証を行い、調査報告書を公表する予定です。

今後は、位置情報把握システムの導入やテレイン周辺部でのパトロール強化、参加者への安全配慮と周知、主催者向け研修など複合的な再発防止策を講じ、「競技の自由と挑戦の魅力を損なわずに、安全を確保する」ことを目指し、安心して自然の中で活動できる環境づくりに全力で取り組んでまいります。

JOA協会員をはじめとする大会運営者の皆様、参加者の皆様、ボランティア・スタッフの皆様、関係機関の皆様には、改めてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

第14回全日本選手権大会（ミドル・ディスタンス競技部門）

全日本大会実行委員会

2025年10月4日、栃木県那須塩原市において、第14回全日本オリエンテーリング選手権大会（ミドル・ディスタンス競技部門）を開催いたしました。

本大会におきまして、競技中に未帰還となった競技者1名につき、その後、死亡が確認されるという痛ましい事故が発生いたしましたことをご報告申し上げます。

ここに、ご逝去された競技者のご冥福を心よりお祈り申し上げるとともに、ご遺族の皆様に謹んで哀悼の意を表します。また、捜索活動にご尽力賜りました関係機関ならびに関係各位に深甚なる感謝を申し上げます。

なお、本事故に関する調査および検証につきましては、2ページに記載の通り、日本オリエンテーリング協会として全体で実施し、その結果につきましては、調査報告書として公表する予定です。

また、10月5日に開催を予定していたロング・ディスタンス競技につきましては、中止の判断をいたしました。現在、再競技の可能性について検討を進めております。また、2026年度大会につきましては、準備が整い次第、改めてご案内申し上げます。

日本オリエンテーリング協会
Webサイト

全日本大会
公式Webサイト

全日本ミドルロング・
スプリント 公式X

優勝者コメント

今回大会に使用した競技エリアは、栃木県内でも屈指の通行可能度を誇るものであり、ミドル・ディスタンス競技においては、全日本選手権クラスにおいて、男女とも実力が拮抗する白熱したレースとなりました。

このレースを制した、美濃部選手・近藤選手は初めてフォレスト種目で全日本チャンプとなりました。大会後の全日本リフレクションは中止といたしましたが、下記にお二人の優勝者コメントをお届けします。

ミドル競技部門 女子選手権者　近藤 花保 選手

全日本ミドルで優勝することができ、非常に嬉しく思っています。
全日本はずっと納得のいく結果が出せておらず、今年こそは納得できる順位を取りたいと思い臨みました。

8月まではTWG（ワールドゲームズ）をターゲットレースとしてスプリントに力を入れていたので、大会後にフォレストでの練習機会を増やし、調整しました。

当日のレースは、大きなミスをすることなく、ここ最近の中でも会心と言って良いレースをすることができました。最後までスピードを維持したまま走り切ることができ、TWGに向けた夏の走り込みの成果が出たと思っています。走り終わった後は、これで負けたら今後絶対勝てないと思っていました。優勝確定のアナウンスを聞きほっとした記憶があります。

毎年日本一を決める舞台で選手とハイレベルな戦いをする場があること、非常に感謝しております。今後も選手として大会を盛り上げられるよう、次は2月の全日本スプリントに向け、しっかり準備していきたいと思います。

ミドル競技部門 男子選手権者　美濃部 駿 選手

はじめに、日頃より全日本大会及びオリエンテーリング界を盛り上げようと取り組む多くの関係者の皆様に敬意を表します。日本最大・最高峰の勝負ができる場が毎年用意されていることは非常に貴重であると再認識しました。このような場で優勝という結果を残すことができ、心より光栄に存じます。

本大会には、大学卒業1年目という立場から、日本を牽引してきたトップ選手たちに挑戦するつもりで臨みました。優勝という結果には満足している一方、今の自分は挑戦者に過ぎず、憧れの選手たちの実力にはまだまだ及ばないと感じています。

まず来年、国内では挑戦を受ける立場としても結果を残し、世界に通用する力を身に付けることを目指して、日々鍛錬を重ねてまいります。今後ともご支援、ご声援いただけますと幸いです。

写真：全日本大会実行委員会

成績表(抜粋)

第14回全日本ミドルオリエンテーリング大会

M21E　5.4km(↑300m)
1　美濃部 駿　0:36:47
2　小牧 弘季　0:37:08
3　平岡 丈　0:37:30
4　伊藤 樹　0:38:26
5　佐藤 遼平　0:38:37
6　及川 悠太郎　0:38:41

W21E　4.2km(↑230m)
1　近藤 花保　0:37:18
2　山崎 葵　0:37:54
3　稲毛 日菜子　0:39: 14
4　桑原 唯歩　0:39:49
5　砂田 優萌子　0:40:09
6　皆川 美紀子　0:41:59

M20E　3.2km (↑200m)
1　八田 湘斗　0:25:58
2　畑田 裕志　0:26:08
3　尾藤 碩　0:26:22
4　福嶋 崇　0:26:39
5　町田 涼介　0:27:20
6　大久保 佑真　0:28:28

W20E　2.5km(↑145m)
1　田谷 夏姫　0:30:56
2　石井 百花　0:32:54
3　高木 優彩　0:33:20
4　山本 美沙　0:33:21
5　久島 典子　0:36:02
6　佐々木 結佳　0:37:43

M95A　1.1km(↑15m)
1　高橋 厚　1:22:11

M90A　1.1km(↑15m)
1　原田 憲夫　0:38:27
2　石田 亘宏　0:45:00

M85A　1.5km(↑65m)
1　尾上 俊雄　0:41:09
2　原野 幸男　1:09:33

M80A　1.5km(↑65m)
1　河村健二　0:29:12
2　児玉拓　0:33:32
3　大場隆夫　0:37:04

M75A　2.5km (↑130m)
1　海老沢正　0:36:59
2　高野 政雄　0:46:31
3　大塚 校市　0:46:35

W75A　1.5km (↑65m)
1　高村 陽子　0:51:24
2　若梅 節子　0:56:31

M70A　3.1km(↑170m)
1　奥山 景得　0:47:57
2　愛場 庸雅　0:50:38
3　小林 二郎　0:51:10

W70A　1.5km (↑65m)
1　大塚 ふみ子　0:51:55
2　山本 陽子　1:08:27
3　植松 裕子　1:28:09

M65A　3.1km(↑170m)
1　早野 哲朗　0:40:00
2　太矢 隆士　0:44:48
3　小山 清　0:46:14

W65A　2.5km(↑130m)
1　渡辺 加与美　0:45:05
2　高橋 明美　1:20:23
3　佐久間 千恵子1:24:18

M60A　3.1km(↑170m)
1　橋本 裕志　0:34:36
2　吉田 勉　0:35:01
3　清水 尊司　0:36:46

W60A　2.5km(↑130m)
1　宮川 祐子　0:36:18
2　宇野 明子　0:39:25
3　小林 正子　0:47:07

M55A　3.7km(↑210m)
1　武田 光　0:42:49
2　香取 伸嘉　0:44:42
3　森 竜生　0:46:41

W55A　3.1km(↑170m)
1　宮本 知江子　0:47:47
2　上島 乃英　0:48:08
3　鈴木 夕紀子　0:55:03

M50A　3.9km(↑210m)
1　羽柴 公貴　0:39:41
2　小暮 喜代志　0:41:01
3　渡辺 研也　0:43:29

W50A　3.1km(↑170m)
1　美濃部 康世　0:43:12
2　清谷 千鶴　0:49:22
3　泉田 みどり　1:17:57

M45A　3.9km(↑210m)
1　水嶋 孝久　0:37:49
2　Beitnes Amund　0:38:29
3　石井 泰朗　0:40:02
4　中田 哲也　0:41:02

W45A　3.1km(↑170m)
1　荘 珮琪　1:01:05
2　Chan Ka Man　1:28:20

M40A　3.9km(↑210m)
1　小山 温史　0:38:12
2　内藤 愉孝　0:47:22
3　坪居 大介　0:51:28

W40A　3.1km(↑170m)
1　小山 睦子　0:52:57
2　高津 寿三鈴　1:17:58

M35A　3.9km(↑210m)
1　田邉 拓也　0:36:19
2　上島 通浩　0:44:27
3　伴 毅　0:48:57

W35A　3.1km(↑170m)
1　池田 麻子　1:01:56
2　西名 紗織　1:04:55

M21A1　4.5km(↑300m)
1　田中 雅崇　0:35:34
2　藤澤 達也　0:36:42
3　古角 海志　0:37:22

M21A2　4.5km(↑290m)
1　斉藤 大己　0:34:35
2　戸上 直哉　0:36:19
3　鈴木 遼賀　0:38:17

W21A　3.7km(↑210m)
1　高野 澄佳　0:43:20
2　木口 瑞穂　0:44:20
3　佐野 萌子　0:45:41

M21AS　3.9km(↑210m)
1　田中 翔大　0:50:57
2　久松 麟太郎　0:54:01
3　富永 興　1:03:05

W21AS　3.1km(↑170m)
1　大澤 貴子　0:49:54
2　猪股 紗如　0:56:43
3　三浦 花梨　0:58:26

M20A　2.6km(↑145m)
1　金城 大武　0:25:42
2　久保田 綴　0:27:05
3　猪熊 亮佑　0:28:11

W20A　2.1km(↑90m)
1　徳倉 朋夏　0:31:26
2　山下 雪乃　0:31:30
3　高橋 怜　0:37:55

M18A　2.1km(↑90m)
1　東 遼次　0:20:11
2　岩崎 瑛亮　0:22:22
3　右田 連音　0:22:47

W18A　1.7km(↑75m)
1　楊 絜如　0:38:55
2　柴橋 芽咲　1:06:24
3　中村 友美　1:07:40

M15A　2.1km(↑80m)
1　Shen Xiang　0:21:08
2　星野 道太朗　0:26:51
3　水嶋 竜也　0:32:47
4　清水 渓杜　0:34:43

W15A　1.9km(↑75m)
1　植松 里咲子　0:36:14
2　加藤 里菜子　0:41:40

M12　2.2km(↑95m)
1　篠原 稜一朗　0:41:40
2　白石 太郎　0:55:16

W12　2.2km(↑95m)
1　源後 彩乃　0:35:42
2　石井 遥花　0:39:44

W10　2.0km(↑60m)
1　篠原 実果子　0:46:44
2　Wang you le　0:50:16
3　加藤 麻里子　1:15:48
4　小山 結夏　1:19:49

全ての成績はこちらからご覧いただけます（Lap Center）

スキーオリエンテーリングニュースレター　WSOC2026に向けて

スキーO委員会

スキーオリエンテーリング委員会では、ニュースレター（Vo.5）を発刊いたしました。グリーンシーズンのトレーニングイベントを紹介しています。

また来年3月、北海道留寿都で17年ぶりとなる日本開催の世界スキーオリエンテーリング選手権大会（WSOC2026）が開催されます。日本代表選手は、下記の男子7名、女子5名です。応援よろしくお願いいたします!!

《男子》
石原 湧樹（アークコミュニケーションズスキーチーム）
寺嶋 謙一郎（東京農業大学/ES関東C）
石原 拓巳（横浜スキークラブ）
小浦 姿（北海道大学大学院）
佐賀 太一（東京都オリエンテーリング協会）
清水 嘉人（札幌OLC）
岩渕 泳人（福島大学/Life8）※U23

《女子》
高野 澄佳（大阪OLC）
佐野 響（デジタル庁/桐嶺会）
阿部 藍凛（岩手県オリエンテーリング協会/安代中学校）
酒井 佳子（北海道オリエンテーリング協会）
荒町 美希（久美愛厚生病院）

World Ski Orienteering Championships 2026
RUSUTSU JAPAN

世界スキーオリエンテーリング選手権大会 公式Webサイト

ニュースレター（Vo.5）

Instagram @ skiojapan
x @ SkioJapan

第6回アジアジュニア・ユースオリエンテーリング選手権報告

チームオフィシャル　宮本 樹

2025年8月26日～30日に愛知県設楽町・新城市で開催された第6回アジアジュニア・ユースオリエンテーリング選手権（AsJYOC2025）に、日本から男子選手が各世代6名ずつの24名、女子選手がW14に3名、W16に2名、W18に4名、W20に6名の15名、選手総勢39名で参加した。今大会の選手選考はJWOCと同様の走力基準と中高選手権や全日本大会の成績、日本ランキングなどを用いて行い、一部女子選手は追加の選考を実施した。

〇スプリント個人種目

公園内の陸上競技場や庭園を使用したコースであった。人工柵を用いたマクロなルートチョイスや基本的なナビゲーションスキルが問われた。W20では佐々木結佳が、W16では石井百花が、M16では西川稜真が優勝した。

AsJYOC2025
大会公式サイト

大会報告書
（PDF）

〇スプリントリレー種目

スプリントリレーは1チーム男女2名ずつ計4名で構成される。各カテゴリーにおいて各国3チームエントリーできるが、人数のそろわなかったW/M18、W/M16、W/M14クラスでは他国メンバーとの混成チームでも出場した。メンバー選考は基本的にスプリント種目の結果をもとに行った。全4クラス中、M/W20(山本美沙-斉藤大己-中村涼太-佐々木結佳)とM/W16(石井百花-西川稜真-伊藤道隆-勝田夏妃)の2クラスで優勝を果たした。

〇ミドル種目

ミドル種目は、急峻ながら尾根上は緩く広がっており、分岐する尾根沢を正確にとらえる難しさがあるテレインであった。全8クラス中7クラスで優勝するという快挙を成し遂げた。各クラスの優勝者は、W20佐々木結佳、M20石原尋季、M18畑田裕志、W16石井百花、M16野本凜太郎、W14勝田有美、M14内山尊。佐々木結佳はアジアジュニアチャンピオン3冠、石井百花は小学6年生ながらアジアユースチャンピオン3冠となった。

〇総括

日本開催でのAsJYOCであったため、テレインやコースになじみがあることもあり各クラスで好成績を収めることができた。一方で、スプリント種目ではジュニアクラスを中心に中国や香港が台頭している。スプリント種目では特に走力の差が如実にタイム差として出やすい。選手選考にあたり走力基準を設けているが、この”基準タイム”を切ることを目標にするのではなく、より厳しい”加点タイム”を目標に継続的なトレーニングを期待したい。今回代表として集った仲間たちと切磋琢磨しつつ時には一緒にトレーニングするなどしてお互いに高めあっていってほしい。

一昨年の香港、昨年のタイでの開催に引き続き、テレイン研究を熱心に行っていた選手が好成績を収めた。香港チームは事前に日本でトレーニングをしており、日本のテレイン対策をしっかり行っている。来年は中国開催であるが実際に中国のテレインに入ることは難しいかもしれないので、衛星写真や各種公開情報を元にテレイン予想をする、中国でのオリエンテーリング情報を収集するなどの対策が求められるだろう。

最後に、本大会の出場にご理解いただいた選手の保護者、ご支援いただいた各関係者、多大なる労力を割いていただいた運営者の皆さんに感謝をいたします。引き続きジュニアチームへのご支援をいただきますと幸いです。

写真：強化委員会

第12回 World Games 2025年 成都大会報告

チームオフィシャル　稲葉 英雄

　ワールドゲームズは、オリンピックの補完的な意味合いをもつ国際総合スポーツイベントで、夏のオリンピックの翌年に開催されている。第12回大会は中国四川省成都市にて開催され、34競技に116の国と地域から4000人近い各競技のトップアスリートが出場した。オリエンテーリングは2001年に秋田県で開催された第6回大会から実施されており、8月6日～12日に24ヶ国から男女計80名がミドル、スプリント、スプリントリレーで競い合った。

　2024年12月にタイで開催されたアジア選手権での好成績により、日本はアジア枠としての出場権を得た。男女2名ずつのフルメンバーでワールドゲームズに参戦するのは、2009年の台湾大会以来、4大会ぶりのことであった。ミドルは小道を繋ぐテレインでの開催が予想されたことから、スプリントにフォーカスして選手選考を行った。当初全日本スプリントの勝者をまず選考する予定であったが、全日本スプリントが開催されなかったことから、独自の選考レースを実施しその勝者と、5月末日時点の日本スプリントランキングの上位より、近藤花保選手、樋口佳那選手、加藤賢斗選手、ニ俣真選手を選考した。

　選考後、国内では暑さ対策を兼ねた計7回のスプリント練習会を実施。現地では主催者が用意した公園でのトレーニング（8/6）のみに参加したが、中国との時差は1時間で時差ぼけの心配もほぼなかったことから調整期間としては充分だったと思われる。ミドル前日とスプリント前日には、それぞれ隣接テレインでのモデルイベントがあり、現地と地図との対比をチェックすることができた。

今大会での最大の目標は、地元開催の際、実力以上の力を発揮する中国(2019年中国でのW-Cupで7位)に勝つこととした。

　競技初日のミドルは35℃を超えるような高温高湿環境下のオレンジ畑、トウモロコシ畑のオープンテレインで開催され、選手たちは終始直射日光を浴びることとなり、大半の選手がフィニッシュ後に救護所に運び込まれ、アイスバスと呼ばれる氷水に浸かる異常事態となった。日本選手は猛暑とオレンジととうもろこしの間の細いあぜ道に置かれた見つけにくいコントロールに苦戦し、ライバル中国の後塵を拝する結果となったが、幸いにも暑さによるダメージは最小限に抑えられた。

　なお、このレース中イタリアの男子選手が救急搬送され、4日後に死亡するという事故が発生した。熱中症が原因である可能性が高いと思われるが原因についての正式な発表はされていない。

　レストデーを1日挟んだスプリントは時折雨が降る滑り易い公園テレインで実施され、ニ俣選手が終盤まで19位に相当する好走を見せた。その後のミスで25位まで後退したものの翌日のスプリントリレーでの活躍を予感させるものであった。

　最終日のスプリントリレーはスプリントと同じ公園で実施され、25℃前後の薄曇りの絶好のコンディションでの開催となった。1走の近藤選手は昨年のWOC、WUOCと同様素晴らしい走りでトップと1分差の集団中の8位で2走に繋ぎ、ニ俣選手も2日連続の好走で集団がばらけつつある中でもトップから1分42秒差の10位で3走にタッチ。ライバル中国に約2分の差をつけた。加藤選手も持ち前の走力を発揮して11位でアンカーへ。この時点で最終的に7位に入ったラトビアとは僅か18秒であった。アンカーの樋口選手も堅実な走りを見せ、ビジュアルコントロール時点では昨年のWOCで7位だったイギリスより先行していた。最終盤でイギリスにかわされたものの、中国には33秒差で勝利し、今大会の最大の目標を達成することができた。

　目標を達成できたのは、選手の弛まぬ努力と皆さまからの絶大なる応援、ご支援の賜物です。スプリント種目に重点を置く選手たちは来年イタリアで開催されるWOCに向けて準備を進めてまいります。これからもご支援ご鞭撻をどうかよろしくお願い致します。

写真：
上段左から
　加藤選手
　ニ俣選手
　樋口選手
下段
　近藤選手

大会公式Webサイトより

オリエンテーリング競技の
競技結果はこちらから

「TREND SPORTS」の中の「ORIENTEERING」を選択してください

世界MTBオリエンテーリング選手権（WMTBOC2025）報告

MTBO委員会　加納 尚子

2025年のMTBO世界選手権大会は8月11日～8月18日の期間中、ポーランドのワルシャワで開催されました。
今年の日本チームは男性4名、女性1名、オフィシャル1名で参加となりました。
メンバーは、この数年継続して代表選手として出場している綾野尋選手、羽鳥和重選手、加納尚子選手に加え、SKI-OのWorld Cupに出場経験を持つ安達利雄選手、日本国内のMTBやシクロクロスの選手として活躍している佐野光宏選手が出場しました。またMTBOチームでは初の試みとして、国内外のプロロードチームのスタッフとして活動されている西應唯花さんにオフィシャルとして参加いただき、Team Official Meetingから各選手のマッサージ、食事手配等幅広くサポートいただきました。

今回の世界選手権大会では、昨年までジュニアに出場していた綾野選手がエリートカテゴリーに上がり、Mass Start競技で45位を獲得したことは大きな成果でしたが、全体的に見れば個人競技、Relay競技ともに苦戦した結果となりました。初参加の選手が2名いたこともありますが、ポーランドのテレインは、日本国内では経験できない軍事施設内の細かい地形や砂地のフォレスト、非常に細かいパスのネットワークといった特徴を有しており、これらの対応に苦戦し大きなミスをする選手が多かった印象です。

例年、日本チームは大会の1週前には選手が現地入りし、対策を行っていますが、その期間では対策しきれない部分で他国との差がついてしまいました。テレイン対策やヨーロッパ特有の森への適応は例年の課題ですが、今年は特に大きく結果に表れてしまったといえるでしょう。
ただし、今回初めてオフィシャルに帯同してもらったことは、チームにとって非常に助けになりました。今までは選手同士でお互いに事務を分担することでこなしてきましたが、この体制では選手がレースに集中しきれない点で問題でした。機材スポーツであるMTBO競技大会への参加には選手以外のオフィシャル、マッサー、メカニック等のスタッフは必要であり、そのような形に近づくことができた点でも大きな意味があったと思います。
またオフィシャル募集活動の中で、オリエンテーリング業界以外の人脈を広げたことも、MTBOの知名度拡大に大きく寄与したと考えています。

加納選手

MTBO日本チームには、現時点では強化・選手発掘・チーム運営といった点で多くの課題が存在しますが、これからも各種目のベストリザルト更新や、女子リレーチーム出場のための選手発掘といった各課題に取り組み、次年の世界選手権遠征につなげていきたいと考えています。
最後に、MTBOチームの活動に、各方面から応援いただき、本当にありがとうございました。

佐野選手

ミドルコース地図（一部）

競技結果はこちらから
（大会公式Webサイト）

MTBO Japanチームは、週末に関東～関西各地にて練習会を開催しています。
代表選手のトレーニングから初心者の体験まで一緒に楽しめるメニューを準備しております。
興味のある方は各SNSからMTBOメンバーに問い合わせをお願いいたします。

Facebook @ MTBO Japan
Instagram @ mtbojapanteam
x @ mtbo_japan

写真：大会公式Webサイト、MTBO委員会

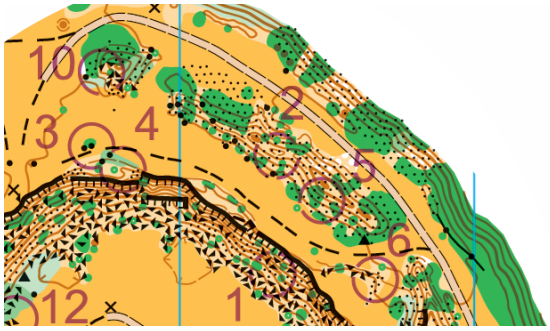
世界トレイルO選手権大会(WTOC)2025報告

トレイルO委員会、WTOC2025代表チーム　田代 雅之

8月26日(火)-31(日)の日程で、世界トレイルオリエンテーリング選手権(WTOC2025)が開催されました。IOF初の試みとなる2国開催で、前半PreO(2日間総合の個人戦)はハンガリーで、後半リレー(3名による国別対抗)とTempO(午前・午後の予選・決勝方式の個人戦)はスロバキアでの開催でした。

[日本チーム選手団]

岩佐佳祐(東大OLK)
岩田健太郎(つるまいOLC)
大久保裕介(ES関東C)
田代雅之(静岡OLC)
伴毅(京都OLC)
平山遼太(千葉OLK/KOLA)
山口拓也(浜松OLC)
荒井正敏(多摩OL/外濠之会)
茅野耕治(ワンダラーズ)



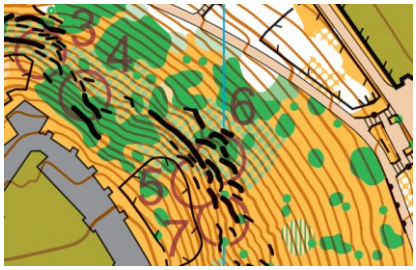
WTOC 2025 PreO Day1							
Part1			130 m				
▷							ZT
1	A-C	↘	⎍	⌣			8
2	A-C		⬭			⊙	12
3	A-C	→	▲			⌀	12
4	A-C		⎍			⊙	12
5	A-D		⁂			⊙	8
6	A-D		⎍			⊥	8

ハンガリーラウンドのPreOでは、オープンの中の地形、岩、植生の特徴を読み取る課題が中心でした。

日本チームはday1、山口選手が好調で、Finish時点で1ミスで抑えた初の選手となり、その時点でトップに立ちましたが、世界の強豪はさらにその上を行き、day1終了時にはノーミスでクリアした選手が20名。

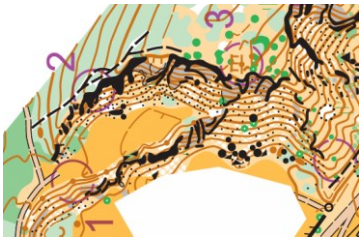
day1終了時の日本チームの最高位は30位の山口選手ですが、トップとは1ポイント差ですから、もちろん上位を狙える位置です。

day2は、高台にある城塞の斜面を下から見上げるパートと、平坦な草原のようなテレインのパートの混合。この日もノーミスでクリアした選手が13名と、ハイレベルな闘いでした。2日間総合の日本チームの最上位は伴選手の54位でした。



後半スロバキアラウンドは、まずは8/30(土)のリレー。3名合計の制限時間の中でPreOパートを3人が継走して、各走者ごとにPreOパートが終わったらTempOパートを競技し、その合計成績で競います。

日本チームは山口-伴-岩田のオーダー。PreOパートではそれぞれが1～2ミスに抑えましたが、ノーミスでクリアする国もあり、1ミスが60秒換算のPreOパートで差を付けられ、上位進出はなりませんでした。



競技結果はこちらから
(大会公式Webサイト)

今回は2国開催ということもあり、大会途中でハンガリーからスロバキアへの長距離移動を伴いましたが、大きなトラブルもなく、それぞれ特徴のあるテレインで競技を行うことができました。

最後になりますが、大会参加に向け応援していただいた皆様に感謝の言葉を申し上げます。

写真：大会公式Webサイト、トレイルO委員会

ねんりんピックオリエンテーリング交流大会・併設大会の報告

岐阜県協会　広江 淳良

ねんりんピックとはいわば60歳以上を対象とした国体で、厚生労働省が推進して各都道府県が持ち回りで毎年開催されています。2025年岐阜県大会では3年ぶりにオリエンテーリング競技が実施されることになりました。地元の下呂市が、広くオリエンテーリングを楽しんでもらう機会にしたいという意向を持っていたことや、テレインがきわめて良質であることから、JOA公認大会を併設することになりました。岐阜県オリエンテーリング協会は人数が少なく高齢化が進んでいて、公認大会とした場合の運営能力に不安がありましたが、隣の愛知県をはじめ、多数の協力要員が集まってくださったおかげで、無事に運営することができました。とても感謝しています。

ねんりんピックは都道府県または政令指定都市単位のチームで争います。チームの構成は1～5名で、各個人がLong/Middle/Shortの3コースのいずれかを走ります。コースと性別によってハンディ・ポイントが付きます。各チーム上位3名の合計タイムを基準点とした上で、1～2名のチームでも係数をかけて3名分のタイムに換算したり、4名以降が完走したときには加点したりするなど、全員参加で争うことができるように工夫しました。結果は、獲得できる想定のポイントを綿密に計算して作戦を立てた兵庫県チームの優勝となりました。

また併設大会では、ねんりんピックに参加できるはずの競技者が公認大会クラスに流れることが懸念されたため、JOA理事会の同意を得て、高齢者のクラスは設けず60歳以上の競技者がエントリーできるのはオープンクラスのみとしました。

ねんりんピックの部　成績結果

1位	兵庫県	谷垣宣孝・大江恒男・吉野信治・橋本裕志	1,384.3点
2位	東京都B	天明英之・上田俊雄・齋藤宏顕	1,114.6点
3位	東京都A	早野哲朗・杉本光正・柳澤貴	902.9点
4位	滋賀県	古津和夫・笹谷康之・平島俊次	794.6点
5位	神奈川県	渡邉英夫・岡田泰三・高橋明美・光瀬美樹	775.2点
6位	岩手県	小野寺俊次・菅原健一・高橋千代司・鈴木宏・三澤儀男	750.9点

JOA公認大会の主要クラス優勝者

M21A	宮本 樹	京葉OLクラブ	1:10:32
M20A	和治郎 アレックス	名相OLC	1:18:39
M35A	深川 陽平	朱雀OK	1:14:56
M50A	高島 和宏	アークスキーチーム	1:23:18
W21A	落合 英那	京大OLC	1:16:27
W20A	浅野 涼花	名相OLC	1:23:17
W35A	上園 久美子	JDOA/入間OLC	2:44:26
W50A	鈴木 夕紀子	静岡OLC	1:33:11

W21A優勝の落合英那選手にメダルをかける野田会長

野田会長と名相OLCのみなさんで記念写真

当日はJOA野田聖子会長も駆けつけて、デフリンピック日本代表選手団の方々や、多くの大会参加者と交流してくださいました。また、全日本大会の事故直後の大会であったこともあり、安全管理には細心の注意が払われました。もともと雨天時に増水する不安のある水系を避けるコースを組んだり、1週間前からテレインでラジオや爆竹を鳴らすクマ対策などをしたりしていたのですが、さらに70歳以上に競技者にココヘリを携帯させることや、迂回ルートの案内の徹底などを行い、翌日の地元新聞に「安全管理万全」と称賛の記事が掲載されました。

この大会は1年以上前からJOA公認大会として万全を期した準備をしていたのにもかかわらず、JOAは前日および同日に開催された他の大会をランキング対象大会に指定してぶつけてくるという出来事がありました。JOAの方針にしたがって、オリエンテーリングの普及や公認大会の権威を高めることに尽力している地方の県協会の立場としては、遺憾の極みであったことを付け加えておきます。

競技結果はこちらから（岐阜県オリエンテーリング協会 Webサイト）

写真：岐阜県オリエンテーリング協会

東京2025デフリンピックを終えて

日本デフオリエンテーリング協会代表　野中　好夫

東京2025デフリンピックは、国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）主催、全日本ろうあ連盟スポーツ委員会主管のもと開催されました。デフオリエンテーリング協会では大会運営経験者が限られる中、（公社）日本オリエンテーリング協会の全面的なご支援により、競技準備から運営まで円滑に進めることができましたこと、心より感謝申し上げます。

2023年夏の初合宿を契機に選手強化が始まり、ヨルク・フェッテル氏を監督、朝間璃衣紗氏をコーチに迎え、選手育成に取り組んでまいりました。大会期間中は、朝間コーチをはじめ、武内トレーナー、井上手話通訳者によるきめ細やかなサポートにより、選手が安心して競技に臨むことができました。多くの皆さまのご尽力により、日本チームは予想以上の成果を挙げ、アジアのトップクラスとしての存在感を示すことができました。ここに改めて深く御礼申し上げます。

朝間 璃衣紗（コーチ、チームオフィシャル）

約2年間デフ選手のサポートに携わりました。デフリンピック本番は、各選手ベストを尽くしたレースができたのではと感じています。応援のパワーも凄まじく、力をもらいました。また、国内でオリエンテーリングがこれほどメディアに取り上げられたのは初めてだと記憶しています。

選手はそれぞれに、オリエンテーリングと出会うまで、出会ってからの努力のストーリーがあります。今後、競技を継続して取り組まれる上で、是非多くのオリエンティアの方々と交流を深めていただき、より楽しんでほしいと心から思っております。

最後に、この2年強の期間で、デフ選手の頑張りに応えるように、オリエンテーリング大会でのデフ選手への合理的配慮がスタートしたと感じております。各大会関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、今後一層の理解が進み、「誰もがより楽しんで参加できる大会」が増えていくことを願っております。

辻 悠佳［スプリント、スプリントリレー、スーパースプリントリレー、ミドル、ロング出場］　※黄色塗りは入賞種目

初めてのデフリンピックで得られたことは、トップ選手とはまず経験値の差が大きいということだ。オリエンテーリング歴3年の選手が、18年の選手に並ぶのはまだ早かったが、フォレストでは、趣味の登山で鍛えられた肺活量と走力が世界に通用したのは大きな成果だった。今後に向けて、トレーニング内容を根本的に見直し、経験を積み重ねていきながら技術を磨き、2年後のワールドチャンピオンシップ、4年後のアテネ・デフリンピックでどこまで通用するのか、非常に楽しみである。また、ヨーロッパの大会に出て海外経験を積み重ねていきたい。

日本デフオリエンテーリング協会としては、デフリンピックの選手の平均年齢層が30代であることから、4年後に向けて、デフリンピックのレガシーを次の世代に伝えていき、若い選手の開拓・育成が必要になるだろう。

堤 大揮［スプリントリレー、ミドル、ロング、男子リレー出場］

初のデフリンピック参加でした。団体競技はプレッシャーがかかるのに比べて個人競技は気楽に臨めました。個人的な目標はミドルディスタンスで上位に入る事でしたのでそれを達成出来たことが大変嬉しいです。

オリエンテーリングという日本ではマイナーな競技が大々的に注目されたのは大変良かったと思います。これをきっかけにデフオリエンティアを増やして4年後に向けて競争が激しくなれば良いと思います。

中森 恵美子［スプリント出場］

デフリンピック終了から一か月が経ちましたが、今でも光景は鮮明に思い出されます。なかでも競技本番での想像以上に大きな応援は、最も印象に残っています。木枯らしの吹く寒い早朝から応援に駆け付けてくれた長年の友人や、千葉県庁、ES関東クラブの皆さまには、今も感謝の気持ちでいっぱいです。

出場したスプリント競技では、ミッドタウン内のカフェテラスを通行する意外なコースに戸惑いながらも、自分の判断を信じて慎重に進み、完走することができました。全国各地の大会でデフオリエンティアへの理解と温かい励ましをいただいたことにも、心より御礼申し上げます。

尾田 継之［スプリント出場］

スタート後、おそらく3分も経たないうちに失格となった。苦手な立体コースであり、そして初めての国際大会という雰囲気にのまれてしまい、普段通りのパフォーマンスができなかった。

朝早いスタートということもあり、前日の結団式は欠席して早めに部屋で気持ちを落ち着かせるべきだったかと思う。

木村 修 ［ミドル出場］

伊豆大島は国内最難関級の微地形が広がり、非常に難しいものでした。思い通りに走ることができませんでしたが、完走できなかった選手も多い中では最低限の役目を果たすことができたと思っています。

２年前にチームに加わって以降、大会参加や合宿を通じて着実に成長し、仲間が入賞する成果にもつながりました。今後も若いメンバーを迎えながら、レベルアップを目指したいと思います。

最後に、大会を運営してくれた方々、サポートスタッフ、応援してくれた方々に感謝いたします。日本でオリエンテーリング競技がこれほどメディア露出したことは過去に無く、これを契機にオリエンテーリングに興味を持つ若者たちが増えて参加してくれることを期待しています。このような機会に日本代表として出場することができたことに感謝いたします。

小嶋 太郎 ［スプリント、スーパースプリントリレー、ロング、男子リレー出場］

オリエンテーリングを始めて1年3ヶ月、メダルを獲ることを目標にしていたが世界の壁は厚く獲れなかった。日本のレベルは世界の中でどの位置にいるのか確認出来た。また、金メダルを獲ったLEVYTSKYI Nazar選手達と速くなるための話を交わし、オリエンテーリング競技に対する考え方や姿勢を学べたのは大きな収穫であり、次のデフリンピックに向けて準備を進めていく!

児玉 健 ［スプリント、スプリントリレー、ロング、男子リレー出場］

スプリントでは、一見通行できそうな場所も立入禁止（オリーブ）であったり、他選手に惑わされる場面もあり、ルートチョイス、ナビゲーション、そして巡航速度の向上が課題として明確になった。

スプリントリレーでは、前日の経験を生かし、立入禁止への対応やコントロール番号の確認を最優先に、落ち着いて、確実につないでいくことを意識して走った。

ロングでは、トップスタートで、いつも以上に緊張した。直後の選手を追走したものの判断ミスが続き、今大会でもっとも悔しい結果となった。他選手への依存が招いた失敗として大きな反省材料になった。

男子リレーでは、 4位でバトンを受け取り、一時は3位まで順位を上げたものの、ハンガリー選手に追いついたことで油断が生じ、ミスを重ねてしまった。最終的に5位で3走に渡す形となり、悔しさが残った場面だった。

大会準備、運営に関わってくださった皆さまのおかげで、特別で最高の舞台を楽しく走らせてもらうことができました。本当にありがとうございました。

上園 久美子 ［スプリントリレー、ミドル出場］

スプリントリレーでは、私はアンカーとしてスタートし、失格となる国も出る中、日本チームは5位でフィニッシュした。コースの難所が連続する中でも、集中力を切らさず、最後まで丁寧なナビゲーションを維持することができた。

ミドルディスタンスでは、初めてのテレインで不安がある中、序盤から方向確認に時間を要し、さらにススキにより地形が見えにくくなる場面があった。結果として、予定していたアタックポイントを見失い、砂漠エリア内でコントロール通過できずDISQ（失格）となった。

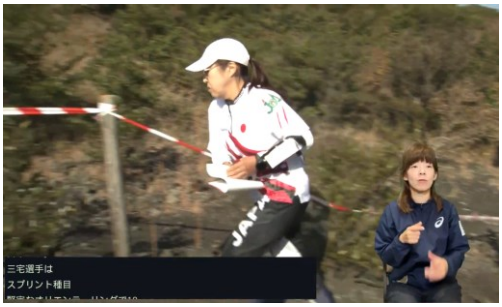
丘村 彰敏 ［ミドル出場］

細かい溶岩地形や見通しが悪い潅木林もあり、集中力が要求されます。この難しさが伊豆大島の魅力にもなっている。

それでも北欧勢は安定して、特にウクライナ選手のスムーズな走りには大きな差を感じました。ルート選択のミスもあり、経験の差を痛感するレースとなりましたが、その中で19位という成果を残せてよかったと思います。

日本は10名が出場し、メダルにもう少しというところでしたが、日本のレベルも上がったのではないでしょうか？ 台湾などアジア勢の成長も著しく、今後も経験を積み重ね、少しでも欧州勢に近づけるようになれたらと思っています。

三宅 裕子 ［スプリント出場］



初めての国際大会となりました。全国各地の大会参加や合宿に参加し、スプリントにも慣れたつもりでしたが、日比谷ミッドタウンからのスタートには緊張しました。仲間の応援があり、緊張が解け集中して走れました。

伊豆大島では大きな目標物が少ないため位置を見失い、競技時間が足りず失格でした。コンパスワークの重要性を痛感しました。この一年は非常に密度の濃い時間であり、体力や技術面の課題も明確になりました。

今後も国内大会への参加と指導を通じて、次の国際大会に向け技術レベルの向上を図っていきたいと思います。大会を支えてくださった関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

井上　晃（手話通訳者）

デフリンピックにチーム通訳者として帯同しました。この1年間ほぼ毎週、選手とともに全国各地の大会や合宿へ同行し、選手たちは走りと振り返りを重ね、大きく成長したと感じています。選手のほとんどは国際大会は初めてであり、緊張する中でも力を尽くしてくれました。一方で、国際手話が使えず、海外選手や大会側との意思疎通が身振り中心となったこと、また通訳者が1名体制でスタートとゴールに分かれられなかったことなど、課題も痛感しました。大会後、選手たちは次の国際大会と4年後のデフリンピック出場に向けて研鑽すること、私自身も国際手話の学習を約束しました。

最後に、選手達がいなかったら私はデフリンピックに参加できませんでした。人生で最高に良い経験が出来たのも選手の皆さんのおかげと感謝しました。

武内　薫（アスレティックトレーナー）

今回、私は初めてデフリンピックにアスレティックトレーナーとして参加しました。期間中は選手・スタッフの健康管理、コンディショニング、テーピング、スケジュール管理補助、レース当日の隔離エリアでの選手サポートなどを担当しました。代々木宿舎での準備期間が限られ十分な支援ができなかった点は反省点ですが、移動後の大島では選手と関わる時間が増え、レース前後の対応も充実させることができました。全選手が無事に出場し、大きな怪我なく大会を終えられたことに安堵するとともに、オリエンテーリング競技特有の貴重な経験を得られたことに深く感謝しています。

今後は今回の経験を活かして、トレーナーとして貢献できるよう、まずは自身も競技を体験したいと考えています。

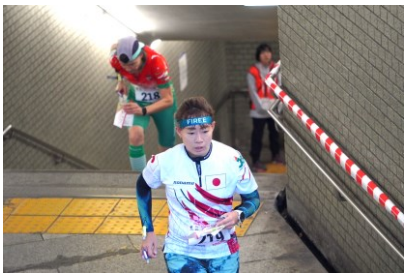
Joerg Vetter（監督）

デフリンピック東京2025において、日本デフオリエンテーリングチームは成功を収めたと感じます。日本デフオリエンテーリング協会代表の野中様よりヘッドコーチ就任の機会を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

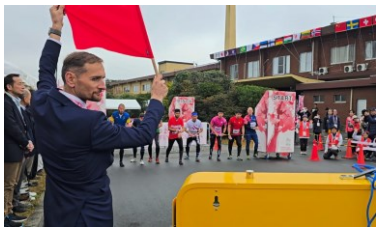
準備は2年前にスタートし、当初は選手5名（うち女性1名）という小さなチームでしたが、1年間で新たな仲間を迎え入れもう1年をかけて毎週末の大会参加や高難度テレインでの合宿を重ねながら、デフアスリートたちの競技力と自信を育んできました。その結果、今回は男子6名・女子4名というチーム体制で大会に臨むことができました。

短期間で高い競技レベルに到達できたことは、非常に印象的です。デフリンピックは終了しましたが、これは始まりに過ぎません。日本のデフオリエンテーリング選手達はさらに強くなり、明るい未来を築いていくと確信しています。

毎日素晴らしいサポートでデフアスリートを支えてくれた4名のスタッフの皆様に改めて感謝申し上げます。



競技結果はこちらから
（大会公式Webサイト）



写真：大会公式YouTube、
日本デフオリエンテーリング協会